
想ヒ音

鈴木 アル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想ヒ音

【Nコード】

N1339B

【作者名】

鈴木 アル

【あらすじ】

忘れたくない、幼い恋の物語。『あなたを想う音が聴こえますか

…?』

第0小節（前書き）

拙い文章ですがお付き合いください。

第0小節

忘れたくないから。

あなたへの想い、書き留めようと思います。

「第0小節」

あなたに初めて会ったのは、高校一年の春、音楽室で、でした。その頃、私たちの住むところではまだ桜の花びらが蕾のままです。外は少し肌寒い。

それでも高校一年生の四月は何か特別な日々だった。

私の、あなたへの第一印象。

あなたが聞いたら少し落ち込むのかな？

お世辞にもかっこいいなんて言えない。むしろ、高校一年生の男の子にしては少し低い背。

少し高い声。

あなたはどちらかというと……女の子みたいで。

私の理想の男性像、新選組副長”土方歳三”から程遠いあなたは、拒絶の対象でした。

本当、笑っちゃう。

今はあなたがこんなにも好きでたまらないのに。

第0小節（後書き）

”あなた”は本当に女の子みたいに華奢な可愛い男の子。

第1小節

いつから、あなたと私の歯車は噛み合い始めたのだろう。

「第1小節」

出会った四月、私とあなたは吹奏楽部に入部した。

ねえ。一つだけ、あなたのこと”スゴイ”って思ってた事があったよ。

それはあなたが吹奏楽未経験者なのに吹奏楽部に入部したこと。

学校説明会の吹奏楽の演奏でコントラバスに憧れて入部したんだ、って誰かに聞いた。

（コントラバスっていうのはバイオリンを人より大きくしたみたいな楽器。）

それってスゴイなあって思ったの。

だって高校から新しい事始めるのって、勇気があることだと思うから。

でも、あなたは女の子と”とても”仲が良いから、吹奏楽部に入りやすかったのかな。

なんて。

こんな言い方は意地悪だね。

でも本当に、そこだけはあなたのことを認めてた。

そういえば、あなたの名前は友達から聞いた。

私は男の子と話すのがあんまり得意じゃなかったし、何よりあなたと仲良くなろうと思わなかった。

「あの子の名前なんて言うのお？」

「サトウヒロトだって」

そんな風に名前を聞いた。

そのときから私はあなたを”ヒロトくん”って呼んでる。
今もずっと。

あなたも私の名前をいつのまにか呼んでいた気がします。

私の名前は”キタノアスカ”だから

”アスカちゃん”

って初めは呼んでたね。

今思うと、すごく、くすぐったい。

ヒロトって良い響き。

あなたの名前、私は大好きよ。

第1小節（後書き）

なかなか展開が進みません。あとからのまとめ読みをお勧めします
(・・・)

第2小節

今の私は、あなたの格好悪いところも、きっと、好きだって思ってしまうの。

「第2小節」

入部から程なくして、私達の吹奏楽部は定期演奏会の準備で慌ただしくなった。

五月頭の演奏会に向けて一年生も借り出された。

経験者は演奏に参加し、その他にも毎年恒例で一年生が演出をするらしい。

私は残念ながら……いや全然残念じゃなかったけど、演出に参加できなかった。

演奏に参加する都合上。

一年生は主役と一緒に踊るバックダンサー役。

女の子数人がダンサーとして選ばれた。

ヒロトくんともう一人の男子が1年生の中での少ない男手だったけど、特になんの役割もなかったみたいだった。

本番がいよいよ近付くと、学校のホールを使って演奏と演出を實際に通して練習した。

2、3回目の通し練習だった。

ある一場面。

ヒロトくんが幼い男の子を装って、ステージに登場。

主役のサラリーマンに物凄い勢いで駆けていく。

そして、ダダをこねる。

「あれ買ってえーっ」

それは、配役的にはよかったのだろうか、まだ恥ずかしさの残る演技で。

私は、ちゃんとやれよ…と心の中で思った。

ヒロトくんは出番が終り、ステージ袖に戻っていく。

その途中、コケた。

シナリオでもなんでもなく、素で。

これだけでも格好悪い。

そして、これだけじゃ終わらない格好悪さ。

次の日からは本番のホールへいよいよ移動しての練習。

また演出との通し練習があった。

あのヒロトくん登場の場面。

でも、ヒロトくんではなく、もう一人の男の子が出てきた。

その子はジュンペイくんというのだけど、まあ…体格が良い子で。

その時、ジュンペイくんはランドセルと黄色い帽子の衣装を身にとって登場した。

……ハマリ役だった。

体格のよさとその衣装のギャップがいまり、演技も何か割り切ったものがあった。

でも、ヒロトくんは？どうしたの？

決してヒロトくんは、演技が出来ないから外された訳じゃない。

ただ、演技ができない状態にあった。

彼は走れなくなっていたのだ。

前回の通しでステージ袖に戻る途中、コケた時にケガをしていた。

……格好悪い。か弱すぎだろ！？

絶対に、こんな男は嫌だと思った。

そんなこんなで、初めから悪かった私の中のヒロトくんの印象は、マックスまで落ち込んだ。
仲良くなれるはずがなかった。

でも、きっと今なら格好悪いと思いつつ、すごく心配する。
今だったら二人で笑い飛ばすこともできるのかな？

第2小節（後書き）

あー私は燃えよ剣の土方さんが大好きです。武士道とかめちゃうくちや好き！！でも土方さんの男らしさを現代の男の子に求めている恋なんて…夢の話（；つム、）

第3小節

一人の人だけをこんなにも愛しく思えるんだ、ってあなたが教えてくれたんだよ？

「第3小節」

定期演奏会も終り、特にヒロトくんとの印象深い出来事もなく、日々は過ぎていった。

ヒロトくんは、もう既に私の中で苦手の部類に位置付けられていたから、仲良くなる努力なんてしてなかった気がする。

それに、その頃の私には気になる男の子が二人もいた。

一人は中学校で同じ委員会だった一個下の後輩。

もう一人は春休みに塾の講習で見付けた同い年の男の子。

私の頭の中はその二人のことで一杯だったから、ますますヒロトくんの事考える隙間なんてなかった。

そのときの私には男と女の友情なんて考えられなかったし。

私は中学の卒業式を目前に控え、後輩にメールで告白をした。

一週間後、返事が来て、フラれた。

新しい恋をしようという時に出会った同い年の爽やかボーイ。

産まれて初めての一目惚れだった。

でも、初めはやっぱり後輩のことが忘れられなくて、毎日、会いたい、会いたい、って思ってた。

何もないまま過ぎていったヒロトくんとの日々だったけど、ある日、二人になる機会ができてしまった…。

学校が休みの時に一日部活があつて、私は迎えの車を待っていた。初めは吹奏楽部の友達がいっぱいた。

でも、ついには何故だか二人になってしまつて…。

「帰っていいよ？こんな二人でいるとこ見られたら、付き合つてるって思われちゃうよ」

私がそういうとヒロトくんは

「別にそういう風に思われてもいいよ」

なんて言った。

心の中で、私は嫌なの！！って訴えた。だって。

もし、今気になつてゐる同い年の男の子、ハセくんにもみられたら？

私には彼氏がゐるって噂がハセくんの耳に入ったら？

………というか、ヒロトくんが私の恋人だと思われること自体、嫌だった。

そんなの口に出せるわけもなく二人で話していた。

そして話の流れで恋愛経験の話になつてしまつていた。

ヒロトくんは付き合つたことがあるって言つてた。

自然消滅だつたけどって。

こんなヒロトくんでも付き合う人がゐるのか、と思つた。

どこが良いんだか、気が知れない、とも。

そのうち迎えが来て、ヒロトくんと別れた。

そういえば、コレが初めてだった。

ヒロトくんとまともに長く会話をしたのは。

本当に、未来つてわからない。

こんなこと、今の私には嬉しいばかりなのに。

第3小節（後書き）

ヒロトとアスカの恋は本当に少しずつしか進みません。初めはすれちがってばかり。私は運命を信じているのですが、人はみんな運命を辿って生きているのだと思います。アスカがヒロトを好きになるのもまた運命なのだと思います。

第4小節

もっと早くあなたを好きになれていたら、もっと長くあなたと一緒にいられたのかな？

「第4小節」

ある日、部活が終わったあと吹部の友達のところへ行くと、何やら恋愛話で盛り上がっているようだった。

「なんの話っ!？」

興味津々で話に加わる。

「ん？サヤに直接聞けって」

「えーっ、何なのお？サヤちゃん教えてえ？」

話題の中心はサトウサヤちゃんだった。

「ん。言っ方がいいよ？」

「んじゃ、教えてっ!!！」

サヤちゃんからの許しも得たから、友達に向きなおす。

友達にサヤちゃんに目配せをしてから、私の耳元でこっそり話してくれた。

「サヤに彼氏ができたんだって」

「ウソっ。誰!？」

私がそういうと、友達はもう一度サヤちゃんに目配せして、

「ヒロトだって」

ビックリした。

どこが好きなの？

あんなナヨナヨしたやつ、って思ったから。

私は未だにヒロトくんと仲は良くなかった。

周りの女の子程には。

周りの女の子はヒロトくんとほとんど女友達のように接していたから。

「おめでとう♪え、どっちからコクったの？」

「サヤからだって」

口ではおめでとうと言いながら、信じられない気持で一杯だった。だから、また別のところで

「どこ好きなんだろうねー」

なんて友達と話したりした。

そういえばその二人は二人で行動していることが多かった。

そっか。そういうことなんだ。

私の知らないところで、部内の恋愛事情は進行していたんだ。

ところで私の恋は…というと。

友達の協力でハセくんのメアドをゲットし、メル友からのスタートを切っていた。

一年生の寒くなる頃には挨拶も交せるようになっていたの。

でも、後輩への思いはなんだかんだ残ったまま。

本当にたまにメールをしたりした。

もう一つ大きな変化があったの。

私の吹奏楽部では夏の大会が終わると、一年生が部長をやることになっていった。

二人の立候補者の中から私は部長に選ばれる。

私は部の中で大事な役割をするようになったのだ。

もし、

あなたが吹奏楽をやろうと思ってなかったら？
私が部長にならなかったら？

きつと、この恋は始まらなかったよ。

第4小節（後書き）

ヒロトは可愛いくせに割とモテるんです。そんなのにひっかかるア
スカはきつと悔しい思いに駆られるんです。

第5小節

サヤカちゃんを守ってあげたくなる子だね。
支えなきゃって思う子だね。

じゃあ、私のことは？

少しでも支えなきゃとか思ってくれてた？

「第5小節」

十一月。

この月の16日はハセくんの誕生日。

私はプレゼントを用意した。

メールで渡す約束もした。

でも、肝心なところで勇気が出なくて渡せずに何ヵ月も過ぎていった。

一月。

私の住むところにはたくさん雪が降る。

だからこの時期、スキー場に行つてのスキー教室があるのです。

学年をクラスごと二つに分けて、それぞれ別の日にスキー場へ行く。

私はハセくんと同じ日にスキーに行ける！って思つてスキーを楽しみにしていた。

例えば、ヒロトくんも同じ日にスキーに行つてたはずなんだけど、一年のスキー授業でのヒロトくんとの思い出はない。

いよいよ当日。

前もってスキーの班編成の調査があつただけど、中級クラスの人
数が多すぎて、テストをして班を編成し直すことに。

私は結構上手だったらしく、上級クラスへ…。

嫌で嫌で仕方なかったけど、なんとハセくんも上級クラスにっ！！ハセくんは学校では違うクラスだったから、すごく嬉しくて、ドキドキしていた。

スキーのために新しく買った帽子の具合を気にしながら、少しでも可愛く見えるようにハセくんをずっと意識して滑っていた。きっと同じ班になれたから調子にのってしまったの。

バレンタインデーの直前には雪祭りがあって、それに二人で行きたいつて思ったのもあった。

私は、バースデープレゼントを渡す時に告白をしようと決意した。

ずっとこの時を待っていたプレゼントの包装は、少しくたびれてきていた。

この頃の私の放課後の習慣は、昇降口の前のスペースで友達と話しながら、ハセくんの帰宅姿を見届けること。

その要領でハセくんの登場を待っていた。

そして、ハセくんがやってくる。

私は急いで駆け寄る。

「ハセくんっ」

私が呼ぶとハセくんは振り向いた。

「あの、プレゼント。ごめんね、遅くなったけど」

「ありがとう」

初めて直接ハセくんと挨拶以外の会話してる！

そう思って緊張はますます高まる。

「あの、それでね」

ついに思いを告げる。

「あたし、ハセくんのこと好きです。よかったら付き合ってもらえませんか」

言っただ！

そう思った次の瞬間。

「ゴメン」

ってハセくんは言ってた。

私ははじめ何がなんだかわからなくて…でも少しするとあ、ダメだったんだ、って理解して。

「あ、うん。じゃあ、バイバイ」

って言ってその場から立ち去った。

そうやって、あっけなく私の恋がまた一つ終わった。

でもまだヒロトくんの出番じゃない。

次はやっぱりあの後輩君への思いに気付き始めるの。

大好きなあの後輩は四月に私の高校へやってくる。

恋の終りはいつでも哀しいものだね。

でもね、今私が感じている哀しさは比べ物にならないよ。

第5小節（後書き）

ヒロトの登場なかったですねΣ（T▽T；）次はやっとヒロトがい
いところを見せてくれます！！

第6小節

私、すごくあなたのこと頼りにしてたの。

同じ様にあなたにも私を頼って欲しかったの。

あなたのどんなに格好悪い姿も受け入れたかったの。

「第6小節」

二月も末になると、また定期演奏会に向けての準備が始まりだす。

私はプログラムに載せる、部長あいさつを考えていた。

日頃の音楽への思いだとか、部活動への取り組みだとかをまとめて書くのだ。

何度も先輩と推敲していくなかで、先輩の求めるレベルの高さに行き詰まった。

だから、いろんな人にみてもらうことにしたの。

別の先輩にみてもらって糸口は掴めた。

文系の友達にもみてもらった。

でも、私のプライドのせいで、その友達の助言を素直に受け入れられなかった。

その時、ヒロトくんにも見てもらったの。

ヒロトくんは部活が終わった後、ギリギリの時間まで原稿の直しに付き合ってくれた。

友達の言うことは受け入れられなかったけど、ヒロトくんの言葉はすんなり受け入れられた。

なんだろうね。

ヒロトくんは上からのもの言い方じゃなくて、真剣に一緒に考えてくれた。

男友達ってこんな感じなのかな、って思った。

このときの私はすぐヒロトくんを必要としていた。
友達になりたい、って今更思った。

直している途中でサヤカちゃんがヒロトくんを迎えに来た。

サヤカちゃんと一緒に帰ったそうだった。

でもね、ヒロトくんはサヤカちゃんと帰ったりしなかったの。

私とギリギリまで一緒にいた、って書いたでしょ？

少し、嬉しくなってしまうたの。

罪悪感があった。

好きとかじゃないから、許して、と心の中で思った。

好きにならないから、と。

だけど罪悪感だけじゃなかったんだ。

それは優越感だったかも。

安心したのかもしれない。

ヒロトくんじゃなきゃダメだっと思ってたの。

だから、ヒロトくんがそばにいてくれて嬉しかったの。

ねえ、私にはやっぱりあなたが必要なの。

他の誰でもなく、あなたじゃなきゃダメなんだよ。

あなたじゃなきゃ…。

第6小節（後書き）

まだアスカはヒロトを男友達として認め始めただけ。コレは些細なきっかけ。ただの些細な出来事。まだ、この頃は。

第7小節

『私はサヤカちゃんみたいに弱くないよ。』

そうやって強がりすぎちゃったのかな。

私をもっと弱いとこ見せてたら、離れないでいてくれた？

「第7小節」

「サヤさあ、すっごいヤキモチ焼くんだよねえ」

そんな話を聞いたのは秋頃だったかな。

そりゃそうだ。

だってヒロトくんは男の子といるのより断然、女の子と一緒にいる時間の方が長かった。

「キタノも気にされてるらしいから気を付けた方がいいよ」

「えー。あたしも！？ありえねわあ」

その時は笑い話。

でも、サヤカちゃんに少し同情した。

私はそんなんじゃないのにな、って思いもした。

私には人の彼氏を奪い取るような趣味はないし、ヒロトくんは恋愛対象じゃないし。

そうは言っても、私が彼女だったら確かに嫌だな、って思ったから、意識してヒロトくんと一緒にいないようにした。

それはヒロトくんと距離が縮まらなかった、もう一つの理由。

「あんまりそうやって女の子にやんない方がいいんじゃないのお？
ある時ふざけ半分にヒロトくんに言った。
でも、ヒロトくんは、

「このぐらいよくね？ウチなりに結構氣い使ってんだけどなあー」
って、なんか、なんていうか…。

ヒロトくんがそう言った時、私にはとっても辛そうに見えたんだ。

辛い思いしながら付き合うのってなんか違うって思った。

ヒロトくんがサヤカちゃんを好きならそれでいいじゃないか。

サヤカちゃんはヒロトくんの特別なんだから、それで十分じゃないか。

私は付き合っても束縛なんかしたくないって強く思った。

そして、春休み。

定期演奏会に向けての合宿があった。

その合宿中にミーティングが開かれたの。

吹部ってそんなもんだよね？

女ばっかで、しかも音楽って精神的にもぶつけなきゃいけないから、
何かと人間関係が難しい。

定期に向けて、自分達はどうしたいのか、そんなことが話し合われた気がする。

ひと事じゃないんだけど。

私は部長だったから真剣に話し合っていたよ？

真剣すぎて、サヤカちゃんの体調の変化になんて気付かなかった。

私が気付いたのは、ヒロトくんが話し合いの輪の反対側から、サヤカちゃんに声をかけに行ったから。

だって、ヒロトくんがみんなの前で、それが当然のようにサヤカちゃんの所に向かうんだもん、目が行かない訳がない。

「サヤ、大丈夫？」

優しく問掛けるヒロトくんの声が聴こえた。

コレが、恋人同士なのかと思ったの。

恋人同士だから、心配でたまらないんだね。

ヤキモチでは決してなくて。

ただ、ただ、懂れた。

夜。

合宿所の食堂はみんなの溜り場だった。

勉強をしたり、部の仕事をしたり、話をしていたり。

そんな中、ヒロトくとサヤカちゃんは食堂と繋がっている調理場にいたの。部員の何人かが皆のために夜食を作ってくれているところだった。

そこに、二人はいた。

私はただ羨ましかったの。

だから、友達と一緒に二人をからかった。

だってお泊まりなもの。

だって高校生だもの。

テンションは上がるし、そうやってからかうのは結構あることですよ？

でも度が過ぎたの。

段々サヤカちゃんの口数が減っていった。

マズイ…、友達も思ってたんだと思う。

その場からみんなで退散した。

結局、謝りもしなかった気がする。

そのあとサヤカちゃんは廊下の隅で泣いていて、友達に慰められていた。

悪かったなあ、って思ったけど、同時にヒロトくんは、大変だなんて思ったの。

別にサヤカちゃんが嫌いな訳じゃなかったよ？

サヤカちゃんは体も、精神的にも弱くて。

好きな人に支えてもらっている姿はとても羨ましかった。

でも、なにか違うような気がし始めていた。

『私はあなたの負担になりたくない』

その一心だった。

でも、私がもう少し弱かったら……あなたは離れて行かなかったかな？

どうしたら、今も一緒にいられたのかな？

第7小節（後書き）

テストがあつたので一休みしてました。これからも更新は遅れ気味かと思っています。期待しないで待っていていただけたらとても嬉しいです（＾▽＾＊）

第8小節

こうやって思い出していくとね、思い出せないことが多くて、悲しくなるんだ。
あなたと一緒にいられた時間、何一つだって忘れたくない、って思うのに。

「第8小節」

周りの女の子たち程には縮まらなかった、ヒロトくんとの距離。
でも、確かにヒロトくんは私の中で近い存在になっていたよ？

初めてメールアドレスを交換したのは、間違っていないければ、ヒロトくんの誕生日の前日。

それは二月の下旬。

ほとんど吹部の放課後の溜り場になっていた、昇降口手前の談話スペース、そこでヒロトくんと何人かで話をしていた。

……話はそれるけど、私の住んでいるところは都会なんかじゃないの。

バスも電車も1時間に1本。

それに料金が高い。

そして、冬場はたくさん雪が降る。

私達の高校は、山にほど近い所にあるから、街中に比べても雪が多い。

重要な交通手段である自転車が乗れなくなる上に、歩いて駅まで行くのは少し大変だ。

だから冬限定で、バスが朝二本、夕一本、学校から駅まで送り迎えしてくれる。

私はチャリ通で冬場は家族の車で登下校。

ヒロトくんは電車通学で、冬場はバス、または、友達の家の子。

話は戻って……この日も私は自分の家の車、ヒロトくんは友達の家の子を待っていた。

「明日、ウチの誕生日なのー」

ヒロトくんは多少、世に言う、おねえ言葉なのかな？
男らしい言葉遣いじゃ決してない。

「そうなんだあ。んじゃあ誕生日祝メールしてける♪」

「キタノ、ウチのメアド知ってたっけ？」

ふと、記憶を巡る。

「あ。そう言えば知らないかも」

「んじゃキタノのも教えてー」

ね、そんな感じだったよね？

ヒロトくんは私をいつの間にか”キタノ”と呼ぶようになっていた。
女友達がそう呼ぶように。

ヒロトくんの中では私はもう女友達の中の一人だったのかな？

ヒロトくんは、私の感じていた距離を感じてはいなかったのかな？

メアドを交換したと言っても、頻繁にメールをするようになるわけでもなかった。

私もヒロトくんもそんなにメールをする人じゃなかったから。

でも、そんな私が、ほんの些細な事でメールを送っていた人がいる。
もちろん、私の好きな人。

タクヤくん。

私の大好きな後輩くん。

私はタクヤくんと再会する。

それは三月の下旬。

春休みに、新入生説明会が行われたとき、吹部は歓迎演奏をした。新入生が入ってくる玄関の前で。

そのとき、私はタクヤくんを見つけた。

そして、心の中で『友達、友達』って一生懸命繰り返していた。だってね？

タクヤくんには長年の片想いが実を結んだ、可愛い彼女がいるって風の噂で耳にしたし、私は一度フラれていたから。

きつと自分の気持ちを見ないようにしていたの。

そして私はこの頃から、タクヤくんをなんとか吹部に勧誘しようと躍起になってメールを送り始めた。

そうやっていくうちに、私は自分の中のまだくすぶっている甘い思いに気付き始めたんだ。

どうして、思い出は色褪せていくのかな？

本当は、思い出にだってしたくないのに。

辛いことだけ色褪せて欲しいなんて言わない。

だから、神様、どうか思い出を消さないで。

第8小節（後書き）

正直に言う、私は標準語と方言の区別がつきません（笑）でも会話の中では普段使っている言葉を使いたい……意味の分からない言い回しなどがありましたらご指摘下さいm（ ）m修正or補足します！！

第9小節

”好き”だけじゃどうにもならないことが多すぎるよ。

私が一番あなたを愛してる自信があるのに。

報われないんだなあ。

叶わないって分かってるけどね、それでも、好きなのやめられないよ。

「第9小節」

時が経つにつれて少しずつヒロトくんへの警戒心は薄れていく。

あの頃の私は、ヒロトくんをあんまりにも男の子として意識してたもんだから、今思うと凄くおかしい。

初めて、

「キタノー。今日車に乗せてって」
って言われた時なんか

「えー。だってそんなことしたらうちのお母さん変な誤解しちゃうよお」

なんて言ってた。

ヒロトくんには失礼だけど、冷静に考えればそんな風になんて見えるわけないのにな。

初めはそんな言い方をしたものの、結局ヒロトくんは私の家の車に乗ることになって。

ヒロトくんは車に乗り込むと、

「アスカさんとは変な関係じゃありませんから」

なんて言うから、私はすごく恥ずかしかったのを覚えている。

でも私は、ヒロトくんを駅まで送った後、

「ヒロトくんって彼女いるんだよー」

ってわざわざ付け加えた。

この頃もまだ、ヒロトくと恋人同士になんて思われなかったの。

その後、ヒロトくんはよく私の家の車に乗るようになる。

何度も繰り返し強調してるけど、ヒロトくんは普通の男の子じゃない。

だからきつとお母さんもすぐヒロトくんを覚えたの。

「あの、女の子みたいな子だべ？」

母はヒロトくんの名前を出すと、そんな風に言った。

私も

「ヒロトくんなんて女友達みたいなものだよ」

なんて言ったりした。

本当におかしい。

時間がこんなにも私を変えたんだ。

そう、思わずにはいられない。

この頃、ヒロトくとサヤカちゃんとの関係は良好なように見えた。

私が迎えるの車に乗り込む時、二人が並んで玄関を出ていくのを何度も見掛けた。

やっぱりこの頃も羨ましかった。

だって、冬は寒くなるから余計に人肌恋しくなるものだし、なんといっても花の女子高生なんだもの。

恋に、恋していたのかもしれない。

そうやって、厳しい冬は過ぎ、道端の雪が気にならないくらい小さ

くなってきた頃、私達は二年生になった。

二年に上がるときにはクラス替えがあった。

私は文系クラス。

ヒロトくんも文系クラス。

サヤカちゃんも文系クラス。

私はヒロトくんと違うクラスになったけど、サヤカちゃんが同じクラスだった。

本人に聞いたのか、誰に聞いたのか忘れたけど、確か、ヒロトくんはそれを喜んではいなかった。

一方で、四月になって私が気になることはただ一つ。

タクヤくんのこと。

これからはタクヤくんと会える機会が増えるはず。

そう思うと嬉しかったけど、同時に会いたくない気もした。

私はあんまり人と触れ合うのが得意じゃないから、きっと会っても上手に振る舞えない。

実際、たまに会っても私は気付いていない振りをして、挨拶されるのを待っていた。

すれ違う度に私は自己嫌悪に陥り、挨拶される度に胸が高鳴った。

そんな風だったから、私の恋は進まなかった。

タクヤくんにはもう二度と告白をしないと決めていたし、彼女がいるなら歯が立たない。

私は一年という年の差を何度も呪った。

タクヤくんにとって、私はただの先輩でしかないって思うと、涙が溢れた。

でも、ずっと好きだったの。

想いは消えなかったの。

あなたは知ってるよね？

私がどれだけあなたのこと好きか。

知らないなんて言わせないんだから。

もし、そんなこと言うなら、分かるまでずっと言い続けてやるんだから。

大好きなのって。

第9小節（後書き）

読んでくださっている方々がいるのを嬉しく思います。単調にしか書けなくてすごく申し訳ないです。でもまだ肝心のヒロトとの恋が始まっていないじゃないかア。それはまだ少し遠い道のりです。交流サイト様の方に行き、書き込みをみてメラメラと闘争心がっ（笑）書かずにいられなくなりまた更新してしまいました（≧≡≦≡≧）ノ

第10小節

もし、こうじゃなかったら、ああじゃなかったら……。もしもの話をしてるにも進まないんだってわかってる。だから尚更、全てが運命であるような気がしてならないよ。

「第10小節」

定期演奏会が終わると、まもなく夏がやって来る。

夏と言えば吹奏楽シーズン本番。

吹奏楽の甲子園、普門館目指しての吹奏楽コンクールが始まる。

そして、それは同時に厳しい練習の始まり。

私の高校は進学校で、先生は大会だからといって課題の量を減らしてくるわけでもなく、部活と勉強をこなす辛い日々が続いた。体調不良者も続出。

その中にはサヤカちゃんも含まれていた。

サヤカちゃんと同中の友達が言うには、親との兼ね合いがうまくいっていない、精神的負担もあったらしい。

そして、ヒロトくんに関わる精神的負担も。

痛々しいくらいにサヤカちゃんは弱っていた。

サヤカちゃんが学校を休むことが多くなったからかな？

この頃二人が一緒にいた所が思い出せない。

そして、きつとこの頃から私のヒロトくんへの思いが加速し始めた。

一方で、私がヒロトくんに近付く障害となる出来事の前兆も、この頃起こる。

夏休みに入るとすぐに地区大会が行われる。

地区大会に刻一刻と近付くにつれ、私達の演奏にも磨きがかかる。そして、いよいよ地区大会。

当日のことはよく覚えていない。

ただ、吹部の部長として、ステージの上で緊張しながら結果を待っていたのを覚えている。

そして、私達は県大会出場を決める。

県大会に向けて夏休みも練習が続く。

県大会は地区大会のほぼ一週間後。

暑さのせいか体調不良者が後を絶たない。

本番に向けて緊張が高まっていく。

あっという間に一週間が過ぎ、いよいよ本番。

その日は体を十分な状態に整えておくためにも、朝5時集合。

学校で練習をして、出発前に、練習していたホールを軽く掃除した。この時だった。

ほんの些細な出来事。

でも、私とヒロトくんを隔てる大きな壁の予兆。それが起きた。

今思ってもバカバカしい。

友達の一人、セイノミキが、私の楽器の片付けを手伝っていたヒロトくんに声をかける。

「ヒロトー。指揮台運ぶの手伝えよ」

確か、この時ヒロトくんはセイノに怒ってた。

「あっちが先に人のこと馬鹿にしたんだよ！？いくらなんでも限度あるって」

と、ヒロトくんはその時のことを話してた。

とにかく、ヒロトくんはセイノに対して怒ってた。

だからその時ヒロトくんはセイノの言葉を無視した。

その後、セイノは他の誰かと指揮台を音楽室へ運んでいった。

ね、それだけだったの。

この時は、私もヒロトくんも大事になるなんて思ってたなかった。

そうこうして、出発の準備も終わる。

みんなどこかそわそわしていた。バスに乗り込む前に突然の応援団からのエールがあつて、空気が少し和む。

そして……いよいよ会場へ。

全てが運命ならば、認めるしかないじゃないか。

あなたが私のそばにいないこの現実を、認めるしかないじゃないか。

それしか、今の私には出来ない、のかな？

そんなの辛すぎるよ。

第10小節（後書き）

私の周りの女の子は言葉遣いが少し乱暴です。私も例外でなく。文にすると何故か乱暴さが倍増……。会話文って難しいですね。御希望とあれば私が読んでお聞かせしますが？（苦笑）でも本当に読みあげたい気持ちでいっぱいですね！。

第11小節

あなたは、人と人を比べるような人じゃない。

でも、私は無意識にサヤカちゃんと自分を比べてた。

何度も、何度も。

あなたはサヤカちゃんのどこを愛していたのだろう、と。

「第11小節」

会場へはバスで移動した。

車で1時間近くかかる道のり。

その移動中、私はヒロトくんの比較的近くに座っていた。

だからよく覚えているのだけれど、この時ヒロトくんは車に酔ってしまっていた。

ヒロトくんは元々酔いやすいらしい。

それに緊張と疲れからくるものでもあったんだと思う。

私はまたいつものように、弱っちなあ、と思ったのだけれど、それを知ったサヤカちゃんは……泣いてしまったらしい、と友達に聞いた。

私は、そんな事で泣かない。

むしろ、そんなの格好悪い、と思ってしまうような奴だ。

でもこの時、サヤカちゃんを格好悪いと思いつつも、私は愛の強さを感じたの。

泣くほど心配な気持ちって、どんな気持ちなんだろう……思いを馳せた。

その時の私に分かるはずもなく、結局、今でも、私には分からないのかもしれない。

会場に着くと、トラックから楽器を下ろし、少しの空き時間のあと、すぐに楽器の準備をしてステージに向かう。

ステージに上がると全てがあっという間に終わってしまう。後は結果を待つばかり……。

全ての団体が演奏を終え、閉会式が始まる。

私は地区大会の時のようにステージで一人結果を待つ。

この上の大会に進むには、まず金賞であること。

それから改めて、次に行ける団体が金賞の団体の中から読みあげられる。

いよいよ私達の高校の番が来る。

「……高校」

緊張の一瞬。

「銀賞」

……夏が、終わった。

私には、来年があった。
でも、私は部長だった。

泣くまいと、最後まで気丈に振る舞った。

意気消沈している部員にかける言葉が、何も見付からなかった。

中学の時から何度も経験している悔しさだったけど、やっぱり耐えきれない。

顧問の先生のところに行くとやっぱり泣いてしまった。

家に着くと堰を切ったように涙が溢れた。

私はなにかはじめをつけたくて、この悔しさを来年までしっかり心に刻みたくて。

だから、2年間伸ばしていた髪をバツサリと切った。

ある先輩には

「遅いよ」

と言われてしまった。

申し訳なかった。

だからこそ、来年こそは、と意気込んだ。

部長になってから、本当に短い一年だった。
心残りが多すぎる一年だった。

ここで吹部の活動は一区切り。

そしてまた新しい吹部が始まるのだ。

私とヒロトくんの関係も、やっと一歩ずつ進み始める。

私には私のいいところがある、って思うよ？

でもね、あなたが一度でも愛していたんだって考えると、やりきれない気持ちになるの。

過去は変えられないなんて承知の上。

でもしょうがないじゃない。

消えない事実だからこそ、私には忘れられないの。

ずっと私を縛り続けたの。

第11小節（後書き）

まだアスカはこのとき、ヒロトは好きじゃないんです。でも気付いてないだけなのかなー？ 御想像にお任せしましょう。秋はラブソングが多くて何やら辛いですねー。

第12小節

あなたは私と交した会話のいくつを憶えてる？

あなたは忘れっぽいひとだね。

だからきつと私の方が憶えてるんだろうな。

「第12小節」

大会が終わったとはいえ、吹部は九月の文化祭に向け、依然として忙しいまま。

残りの夏休みも、たいてい丸っと一日部活をしていた。

そんな中の一日だった。

私は初めてヒロトくんと二人で帰った。

ヒロトくんは駅まで自転車で帰るのだけれど、途中まで私の帰り道が同じだったから。

もう一度言っておくが、ヒロトくんはとても女の子と仲が良い。

女の子と二人で帰るなんて彼にとっては日常茶飯事。

ただ、友達同士の二人がそれぞれ自分の自転車に乗って、並んで帰るだけ。

でも私にとってそれは非日常的な出来事。

初めては少し、恥ずかしかった気がする。

一度一緒に帰ると、その後も何度か一緒に帰るようになる。何度かって言っても、多くて5回くらいだったけど。

この頃の私は、前ほどに、『ヒロトくんと変な関係に誤解されたくない』と思わなくなっていた。

だから二人で帰るのを意識的に避けようとはしなかった。

むしろ一人で帰るよりはずっと楽しかったし、そうなることを少しは望んでいたのだろうか。

別にヒロトくんを男の子として認めたとかではなくて、友達として割りきれるようになったんだと思う。

一緒に帰りながらも思い出すのはサヤカちゃんの事。

罪悪感っていうのかな？

少し違うかもしれない。

一生懸命、『ヒロトくんはサヤカちゃんと付き合ってるんだから』と自分に言い聞かせた。

そうしないとバカな私は勘違いしてしまうから。

ヒロトくんに淡い恋心を抱いてしまいそうだったから。

一緒に帰る時、私達は何を話していたんだっけ？

確か、吹部の事、曲の事、課題の事、先生の事……etc.

ある時は、部活が終わった後話し終わらなかった、私の恋バナだったりもした。

そのときのことを一番鮮明に覚えている。

私はタクヤくんのことを中学の時から話した。

ヒロトくんはまがりなりにも男の子だから、男から見てのアドバイスをくれるんじゃないかって期待して。

結局、アドバイスもらった記憶はないんだけどね。

ケータイのアドレスはタクヤくんの名前から考えたもので、彼氏が出来たら変えようと思っていたる事とか、誰に告白して、付き合ってるなんて私の数少ない恋愛経験の話もした。

これって、私の中ではぐっと距離が縮まった証拠だった。

たとい自分の恋に利用しようとした裏があったのだとしても。

それは信頼の証だった。

この時私はやっと、一年生の頃、あの、初めてヒロトくんとまともに話した時、ヒロトくんが私のそばに立っていてくれたのと同じ距離に立てたのかもしれない。

ねえ、ウソだよ。

私の方が憶えてるなんてウソ。

あなたは私が忘れてしまっていたことも憶えていてくれたんだっけ。それはとても些細なことだったけど、とてもとても嬉しかった。

あなたの中に、ちゃんと私がいるって思えたから、すごく、嬉しかったの。

第12小節（後書き）

祝！！読者数100人突破☆御愛読ありがとうございます（＊ハ
ー）ノ♪……遅いですか？イヤ、マイペースで頑張ると決めたんだ
い（＊、旦那）ノこれからよろしくおねがいします。ところで気
になるのはどなたが100人目だったのか……

第13小節

あなたがそばにいない未来なんて考えたくもなかったよ。

あなたがいなければ、きっと寂しいんだろう、と思っていた。
でも、私バカね。

あなたがいなくてもなんとかやっていける自信もあったの。

「第13小節」

「今、セイノとうまく行ってないんだー」

ヒロトくんとそんな話をしたのは夏の厳しい暑さがおさまった頃だったかな。

「え、気付かなかったあ。なんでや？」

その時帰ってきた答え。

本当、くだらない。

覚えていますか？

私はヒロトくんに言われるまで忘れていました。

「県大会ん時？ウチがセイノに指揮台運ぶの手伝ってって言われてシカトしたじゃん？あん時から」

本当、信じられない。

私は二年のクラス替えで、セイノと同じクラスになっていた。

セイノは、なんて言うか、ちゃんと周りの事まで目が届く、頼りがある子だと思う。

んでも、性格がキツイっていうか、時折、ビクッとするくらい自意識過剰な、行きすぎた考え方をする。

今回もその性格が発揮されたのだろう。

「謝ったらいいんね？」

部内で衝突があるのはやっぱり良くはないと思ったから、そう言った。

仲が良いのに越したことはないし。

「でも、ウチ悪くなくね？」

「なんでー」

ヒロトくんがシカトしたからセイノは怒ってるんでしょ？

そう思ったけど、ヒロトくんの言い分を聞くと、

「あっちが先に酷いこと言ったからシカトしたんだよ？ウチ謝る必要ないじゃん」

と言うことらしい。

なんでもヒロトくんは理由が分からないのに謝るのは嫌なんだそう
だ。

まあ、理解できなくもない。

酷い事の内容は忘れてしまったけれど、確かに誰でも怒ってしまう
事だった気がする。

だから、ヒロトくんが謝らないっていうのも分かるけど、セイノか
らは絶対折れないという確信があった。

セイノはプライドが高い。

執念深いって言ったほうが正確なのかな？

良く言えば意思が強いとも言えるのか、いつの間にか機嫌を直して
いるなんて、絶対に考えられなかった。

仲直りするにはヒロトくんから謝るしか方法はなかった。

あの話の後気付いたのだけれど、セイノの近くにヒロトくんは絶対に行かなかった。

私はクラスでセイノと行動することが多かったから、必然的にヒロトくんは私の近くにもいないことになる。

折角ヒロトくんと距離が縮まりかけていたのに、また距離が広がってしまったような気がした。

結局、この時はヒロトくんがセイノに謝った。

ヒロトくんがセイノに謝罪メールを送ると、あっけなくセイノは許してくれたらしい。

今思うと、セイノとヒロトくんの歯車は、この時完全に元通りにはなっていなかったんだ。

ここから数カ月、セイノとヒロトくんはまた前のように仲良くやっていく。

セイノは前からよく、サヤカちゃんの事についてヒロトくん色々な指図していた。

セイノは極端なほどサヤカちゃんを心配し、それにサヤカちゃんの相談にも乗っているみたいだった。

そして同時にヒロトくんの悩みを聞いていた。

ヒロトくとサヤカちゃんがうまく二人でいるにはセイノがいなくてはならないように見えた。

だから、今、セイノとヒロトくんがこうなってしまったのは、きっと当然のことだったんだ。

このころ私はタクヤくんとなんとか話す機会が欲しくて、色々と考えをめぐらせていた。

そして思い付いたのが同窓会。

その時の委員会の人達とは仲がよかったから、同窓会を企画してもまったく不自然じゃない。

すぐにもタクヤくんに会いたくて、中学の時から友達で、委員会のメンバーでもあったミナに協力を仰ぐと、ミナも乗り気になってくれた。

ミナは中学、高校と一緒に吹部で活動してたからすごく仲が良い。ミナと手分けして委員会みんなに連絡をとって、十月の半ばに同窓会を開くことになった。

同窓会のためにミナと服を買いに行ったり、ダイエットをしようかと相談したりした。

久しぶりにタクヤくと長い時間一緒にいられる。

そう思うとタクヤくんに会える日が待ちきれなかった。

そうやって待っている時間さえ本当にキラキラしていた。

そしていよいよ同窓会の日。

買ったばかりの服に袖を通し、慣れない化粧をした。

少しでも可愛く見えるように。

少しでも私の姿がタクヤくんの中に残るように。

ドキドキしながら同窓会の場所に行く。

私の所では、高校生が大勢で集まるといったら、バイキングかもんじゃない焼きなんだけど、その日はもんじゃ焼きの店で同窓会。

メンバー総勢13人が揃い、中に入って、席につく。

この時ね、隣にタクヤくんが座ってくれた。
嬉しくてたまらなかったなあ。

だって、隣には好きな人がいて、しかもおんなじ鉄板の上の物を食べ
るんだよ？

ドキドキして仕方なかった。

でもね、やっぱり私はあんまりタクヤくんと話せなくて。

ミナがタクヤくんや他の人と話しているのにおまけで加わるくらい
しかできなかった。

その後二次会でカラオケにも行った。

その時も隣にタクヤくんがいて。

ああ、もうヤバかったんです。

だってカラオケだから、ラブソングとか歌っちゃう訳ですよ。

タクヤくんが私に向けて歌っていた訳じゃないけど、なんだかいつ
もより切なく心に響いた。

一緒にいられなかった時間を埋めようと、もう必死でタクヤくんを
見つめてた。

これから会えなくても、タクヤくんの顔をすぐに思い出せるように、
ずっと見つめてた。

あっという間に幸せな時間は終りを告げる。

結局、私はタクヤくんの隣にいただけだった。

それでもそれはとっても幸せな時間で。

タクヤくんを好きな気持ちが増えた気がした。

なかなか会えないし、そんなに仲が良いわけでもない。

毎日の中でタクヤくんを意識しないことも多くなってきてい
た。

でもこうやって会って、少し言葉を交すだけで、やっぱり好きな人

だ、って実感した。

自信なんてとっくの昔に崩れ去ってしまった。

思ってた以上にあなたがそばにいないのは辛いよ。

あなたがそばにいた温もりを憶えているから、なおさら辛い。
想像していたよりずっと、私はあなたを必要としていたの。

第13小節（後書き）

いつもより長めなのですがどうでしょうか？読むの大変でしょうか？大丈夫なようならこれからはこのくらいの長さでいきたいと思います。今回の会話、ちゃんと理解できますか！？なんとなくいつもより会話多めなんで心配です（；´∀´）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1339b/>

想ヒ音

2011年1月8日02時31分発行